

「イレネに介抱される聖セバスティアヌス」主題の図像学的・図像解釈学的考察 —ジョルジュ・ド・ラ・トゥールを中心として—

津上 朗（慶應義塾大学）

「イレネに介抱される聖セバスティアヌス」は、カトリック改革期以前にはほぼ描かれず、17世紀以降カラヴァッジェスキを中心に頻繁に取り上げられるようになった主題である。17世紀前半にロレーヌで活躍したジョルジュ・ド・ラ・トゥール（1593-1652）もまた、同主題を3種類のヴァリエーションで描いており、画家再発見の契機となったカルメの『ロレーヌ書誌』には、この主題の絵がフランス国王に献上された旨が記されるなど、様式の展開と図像の伝播、当時のロレーヌの社会・政治環境を知る上で重要な作品群と言える。本発表では、殉教聖人の介抱の場面という特徴的な場面選択の系譜をテキストと図像の両面から辿り、ラ・トゥール作品の位置付けを明らかにする。さらに、画家が同主題を最初に取り上げた1630年頃のロレーヌの政治的・社会的・宗教的状況と人的交流に目を向け、とりわけロレーヌ公アンリ2世のもとで教皇庁に派遣されローマに滞在し、その後ナンシーのルフェージュ女子修道院創設に関わった聖職者ニコラ・ヴィアルダンと同主題及び画家との関係について考察する。

この主題が17世紀初頭から頻繁に扱われるようになった要因として、歴史資料に基づく聖人伝の確立が挙げられる。聖人殉教の約150年後、430年頃の小アルノビウス著『聖セバスティアヌスの受難』には、聖人がイレネに介抱されるというエピソードが登場する。この介抱の場面は『黄金伝説』等には記述がなく、16世紀末のバロニウス著『教会年代記』によって徐々に人口に膾炙し、その後リバデネイラやパチェーコに踏襲された。図像としては、15世紀後半の聖人伝連作や版画の中にごく少数の例が認められるも、100年余りの空白期間を経て、1600年代にイタリアを中心に天使に介抱される聖人図像が登場し、次いで1610年代には昼の情景として、1620年代から30年代にかけてはラ・トゥール作品と同様、夜の情景として本主題を描く例が増加した。

フランスと神聖ローマ帝国に挟まれたロレーヌ公国において、ラ・トゥールが同主題に着手した1630年代前半は、30年戦争の戦禍とペスト流行に見舞われた悲惨な時期であった。ゆえに同地の複数の画家が聖セバスティアヌスを描いているが、本発表ではこれまで看過されてきたジャン・アルマン作《聖セバスティアヌスの殉教》（1626-31）に注目する。聖人の単なる処刑場面ではなく、イレネによる介抱の図像への移行を示す本作例には、ナンシー司教区視学官であったヴィアルダンの紋章が描き込まれ、その後の来歴からしても同地の聖堂でラ・トゥールが実見できた可能性が高い。ヴィアルダンについては、ラ・トゥール研究において示唆されてきた複数の人物・団体との繋がりを見出すことができ、アルマン作品との比較を通して、同主題の図像の系譜とロレーヌ特有の文脈とを結びつけることができるだろう。